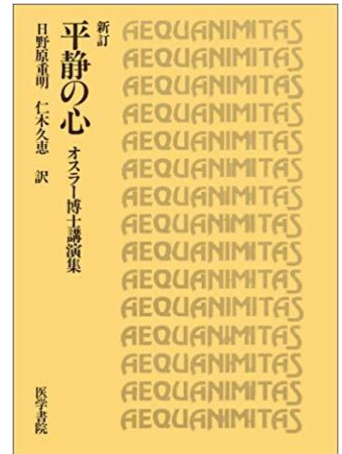


● Dr. 井上林太郎の書籍紹介

平静の心 -オスラー博士講演集-
日野原重明・仁木久恵 訳 医学書院 1983年9月初版



はじめに

昨年9月に取材を受けて、10月記事となった。「お医者さんとどう向き合う？ -すれ違う医師と患者-」というタイトルであった。正直なところ、私はめったに中国新聞を読まないの... (text continues)

『「知識は容易に得られる。だが、叡知を得るには時間がかかる」という言葉があるが、医学に関して言えば、現代生きる我々凡人が、古代ローマ人以上に思慮分別を持っているとは言えないだろう... (text continues)

皆様方にとっての理想の医師とは。がんとは直接的には結びつかないが、参考になると思うので、今回は本書を紹介する。

訳者略歴；

日野原重明 (ひのはら・しげあき)

1911年(明治44年)10月山口県に生まれる。1937年京都大学医学部卒業。1941年より、聖路加国際病院に勤務。1951年米国エモリー大学に留学... (text continues)

仁木久恵 (にき・ひさえ)

1961年津田塾大学卒業。1965年テキサス大学大学院にて Master of Arts 取得。1968年津田塾大学大学院博士課程修了。聖路加看護大学教授、明治大学教授を経て、現在、明海大学名誉教授。

本書の内容・感想

ペンシルベニア大学を去る時、卒業式で告別講演を行った。ウィリアム・オスラー先生(写真)の遺した講演の中で、最も有名なものである。1889年(明治22年)5月、39歳のときである。抄出する。

『諸君は卓越した地位を授けられ、それに伴う重大な職務と責任を果たすために、今日この大学を巣立つ。そこで、諸君の一生を左右する要因の中から、次の2つを取り上げる。』

まずは第1に、内科医・外科医を問わず、医師にとって、「沈着な姿勢」、これに勝る資質はない。医師に不可欠とも言える身体に備わる美德だ。優柔不断でいつもよくよし、それを表面に出す医師、日常生ずる緊急事態に狼狽し取り乱す医師、こういう医師はたちどころに患者の信頼を失う。沈着な姿勢を真に完璧なものとするためには、幅広い経験と病気の諸症状についての詳しい知識が必要である。知識を備え経験を積

んだ医師は、何事が起ころうとも、心の平静さを乱されることはあり得ない。今後起こりうる事態は歴然としており、取るべき行為は決まっているからである。

第2に、身体的な資質と対をなす精神的な資質に注目してみよう。ローマの賢帝、アントニヌス・ピウス(86 - 161)は、自宅で死の床に臥せていたとき、自らの人生観を要約して、「平静の心」という言葉を座右の銘とした。アントニヌス・ピウスと同様、諸君も、「平静の心」を持つことが望ましい。平静の心は天性の気質に負うところが大きい。それと同時に、自分と周囲の人間、あるいは生涯をかけた職業と自分がどう関わり合っているのか、この点についても、はっきりとした認識を持つことが必要不可欠であろう。

悲しいことだが、諸君は将来、失望あるいは失敗に見舞われることもあるだろう。その時まで、不幸にめげない明るい平静の心を身につけておくことが望ましい。諸君に平静さを説いてはいるものの、実は、この私自身が心の定まらない漂流者である。教授・学生諸君、ごきげんよう。あの良き古(いにしえ)のローマ人の座右の銘「平静の心(Aequanimitas)」を胸に抱き、これからの闘いの日々を歩んでいっていただきたいと思う。補足だが、aequanimitasは、ラテン語である。平静、冷静。理性を尊び、感情にとらわれない沈着な態度を意味する(本書注)。

オスラー先生は、看護師を愛し、医師以上に患者のケアの中心的ケアの中心的担い手の役を務めるのは看護師であると信じていた。私も同感である。1897年6月のジョンズ・ホプキンス病院看護学校の卒業式での講演も心に響く。抜粋する。『我々の中には、次々に展開する苦しみを目の当たりにして、当初抱いていた共感の鋭い刃を徐々に鈍らせてしまう者もいる。我々医師と看護師は、自らの感覚を鈍らせないために、永続的な矯正措置を1つだけとることができる。それは、孔子の言う人類の黄金律を患者に実践することである。子曰く「己れの欲せざる所、人の施すこと勿かれ」と。この言葉は完徳の勧めとしてキリスト教でも用いられているので、我々にも馴染み深い言葉である。律法も預言者の言葉も、この語句の中にすべて言い尽くされていると言えよう』。本書の注によると、完徳の勧めとは、新約聖書、マタイによる福音書(7:12)、「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもその通りにせよ」である。私も再度、孔子の言葉を確認した。

話は前後するが、オスラー先生について紹介したい。日野原先生の著書、「医学するところ—オスラー博士の生涯—」より抜粋する。『ウィリアム・オスラー(1849 - 1919)は、イギリスの思想家カーライルの実践哲学を受けて、生かされている今日という日に全力投球して日々を生きた人であり、オスラーは医学生を講義室よりも患者が終日いる病室で教育したことで有名である。そのオスラーの名著として知られている「平静の心」は、オスラーがアメリカ合衆国で内科教授をしていたとき、医学生、看護師、開業医に行った18回の講演をまとめたものである。この本は、私が医師となつてからの半世紀以上の生涯を通して、座右の書となり、私の臨床医学と医学教育への情熱の油となって、私のからだの中で燃えつづけた。』

『オスラーは1849年に英人の牧師の子として、カナダに生まれ、1919年に英国オックスフォードの“Open Arms”の愛家で70年半の生涯を終えた。36歳から56歳までの人生の絶頂期は米国のペンシルヴァニア大学とジョンズ・ホプキンス大学で過ごした。彼は病理学から臨床へ、さらに予防医学へと、医学の全野を涉猟し開拓し、それらを緊密に結びつけていった。研究と、診療と、教育とに、彼ほどのひたむきな情熱を捧げ、また言葉を行いとしたりした医人は東西に稀であろう。医者は単なる科学者ではない。むしばめる体と病める心に触れ、これを癒し慰める科学者たるべきである。オスラーには、科学者としての精緻な観察力、冷静な思考力と共に、人の心情の琴線に触れ、多くの人々の友となる心の豊かさが備わっていた。文学、哲学に対する深い造詣と、幼き日からの信仰と、人に仕えんとする心とが彼をしてまったく人たらしめたのである。』

本書に戻る。医術とは何か。『医術(art of medicine)の定義として最も優れたものの1つで、私の内科の教科書を飾る表題に選んだ文は、「つまり医術の方は、患者の本性を考察し、また自分が取り行う色々な処置をもよく研究していて、そしてその1つ1つのケースについて理論的な説明を与えることができる技術(アート)である」と書かれた1節である』と述べている。これは、プラトンの著書、「ゴルギアス」からの引用である(本書注)。1903年の秋、オスラー先生は医学生に次のように講演している。『医療とは、ただの手仕事ではなく技術(アート)である。商売ではなく天職である。すなわち、頭と心を等しく働かせなければならない天職である。諸君の本来の仕事のうちで最も重要なものは水薬・粉薬を与えることではなく、強者より弱者へ、正しい者より悪しき者へ、賢い者より愚かな者への感化を及ぼすことにある。諸君の仕事のゆうに3分の1



は、専門書以外の範疇に入るものである』。

日野原先生は、終戦後、本書に出会われ、日本の若き医学徒のために、昭和 58 年、翻訳して出版された。その後、「オスラーの精神は、半世紀半余にわたる私の医師としての生涯の中に消えることなく燃えつづけており、また行く手をも指し示し続けてくれると思う」と述べられている。遅れて本書を手にしたが、私もオスラー先生の精神を少しでも吸収し、叡智として身につけ、医術を実践していきたい。

理事 井上 林太郎